

全労済協会 慶應義塾大学経済学部寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造

～新しい福祉価値をどのように生み出すか～」

第2回 2021年10月12日

「SDGsの意義と課題」

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター 村上芽氏

■改めてSDGsとは？

日本総合研究所は、三井住友フィナンシャルグループのシンクタンクで、私はその中の創発戦略センターという部署にあります。そこでESG（環境、社会、ガバナンス）分野の企業調査、SDGsと企業経営、変動と金融、子どもの参加論といったテーマで仕事をしています。本日はSDGsについて、最近の企業の動きも絡めながらお話をしていきます。

まず、改めてSDGsとは何かを考えたいと思います。お馴染みの17個のゴールからなるSDGsの特徴としては、全世界共通の目標であること、達成するには毎年年間5兆ドルから7兆ドルのお金が必要といわれていることが挙げられます。これを進めるには産業界の役割が非常に大きく、政府や援助機関だけが開発目標をもって取り組むというのではなく、皆が取り組まないと達成できないようなものとなっています。

なぜSDGsが必要とされたのか、少しだけ遡らせてください。SDGsができたのは2015年ですが、1987年の国連のブルントラント委員会で言及され始めたのが持続可能性という概念でした。そこで、経済的に豊かになるということと、有限な地球環境と資源、どちらかを捨てればどちらかが立たずということではなく、両立して発展できるはずだという考え方が打ち出されたのです。それから30年以上経って、どうなったか。気候変動にしても、環境汚染や自然破壊にしても、格差や貧困、ジェンダー差別といった社会問題にしても、昔から言われてきたことではありますが、これを本当に放置しておくビジネスリスクとしてまずいという認識が一般に広がるほど、課題が深刻になってしまいました。

私は、SDGsを考える際に重要なキーワードが二つあると思っています。一つは「誰一人取り残さない」、もう一つが「大胆な変革」です。「誰一人取り残さない」はSDGsの基本理念で、これが公式には一番大事なポイントになりますが、「大胆な変革」も必要で、今まで豊かだったからこのままでいいということではなく、やはり何か思い切って変えていかなければ、未来は非常に厳しいものになるということです。

■SDGsを巡る世界と日本の動き

今、申し上げたような背景と特徴があるSDGsですが、日本と世界の動きについて、特にコロナを受けてどうなっているのかということを紹介したいと思います。

実は去年（2020年）の半ばの時点ではっきりと影響が出てきているといわれるくらい、SDGsはコロナの影響を悪い方に受けています。毎年、国連のSDSN（持続化可能ネットワーク）という機関がレポートを出しているのですが、去年の半ばの段階で、かなりネガティブなレポートが出てい

ます。健康に関してはもちろん、教育機会が失われるとか、失業する、貧困や飢餓の状態に陥ることが挙げられています。ではどうするか。SDGsに向けた計画を進めることで、パンデミック後の世界を目指した復興を考えていくべきだろうということです。レポートにはコロナからの復興、ビルドバック・ベターという言葉や、教育、健康、エネルギー、食糧、デジタルというキーワードが載っていました。

こうした中で、日本政府はどのような取り組みをしているのか説明します。2019年に、SDGs実施指針を改定しました。SDGsには17個のゴールがありますが、日本政府は日本の文脈で少し読み換えて、8個の優先課題としてまとめています。日本の特徴は、優先課題の2番に「健康・長寿の達成」とあるところです。世界全体では、まだ新生児や乳幼児の死亡率を下げるのが先決とされている中で、長寿という言葉が入っているところに日本の特徴が表れています。

先ほどコロナ関連のレポートを出したという話をしたSDSNという機関が、毎年SDGsの国別の達成度合いのレポートも出しています。それによると、今年の夏の時点で日本のSDGsの達成度は、世界で18位でした。先進国の中では寂しい順位です。特に5番、「ジェンダー平等」が上位17か国に比べて圧倒的に低いのが特徴です。評価に使われるデータの種類が限られていることもあって一朝一夕に改善するのは難しいのですが、「ジェンダー平等」に関してそれだけ世界と水を開けられているということは認識しておくべきです。

■SDGsと企業経営

企業が社会的責任を果たすべきだという議論や運動は、以前からありました。日本では2003年をCSR元年と言われましたが、改めて知っておくべきなのは1997年のナイキの不買運動です。これはスポーツシューズを作っているアジアの受託先の工場で児童労働が発覚して、欧米を中心に不買運動が起きた事件です。これをきっかけに、企業は自社のオフィスと工場だけではなく、生産を委託している工場とか、サプライチェーン全体を見て社会的責任を果たさなければならないという認識が広がりました。

SDGsと企業経営という点で、例えばレゴ社のプラスチックを廃してサステナブルな製品づくりを目指す動きや、スターバックス社のコーヒー豆の生産者の暮らしを向上させる取り組みには注目したいところですし、企業と人権というテーマに興味があれば、日本のANAの人権報告書、不二製油グループ本社の人権方針などを調べてみると面白いでしょう。

■今日が一番よかったと思える、より良い世界を作る

ESG投資家の間では、自然資本というワードに関心が集まっています。自然資本は、単に壊しちゃダメ、自然を保護しましょう、今まで通りということだけではなく、例えば、道路を作ってインフラを整備する場合に、そこで自然への配慮は必須という上で、より良くしていくことができるのか、「ネットゲイン」を目指すべきではないのかという議論が始まっています。この議論はまだこれからというところですが、注目したいテーマです。

最後に、環境問題や社会問題がもともとなければESG投資もSDGsも生まれませんでした。けれども、単に昔が良かったわけではありません。毎日、今日が今までで一番よかったと思えるような、より良い世界を作っていきましょう。

<文責：全勞濟協會調査研究部>